研究ノート　ニダバ（*Nidaba*）34(2005)，175-184

「カリスマつまみ食い」論文作法の戒め

― 使役構文の分析を例として ―

田　原　　薫

0．はじめに

本論考は特定の学術的テーマを論じるのでなく、その論じ方、従って「論文作法」に関するものである。文科的学問である言語学は、誰か偉い人によって画期的な説（たとえば変形生成文法）が提唱されると、それを引用してその上に自説を組み立てることが普通であるが、原説の思想を無視して技法だけをつまみ食いした結果の失敗例を見てみよう。

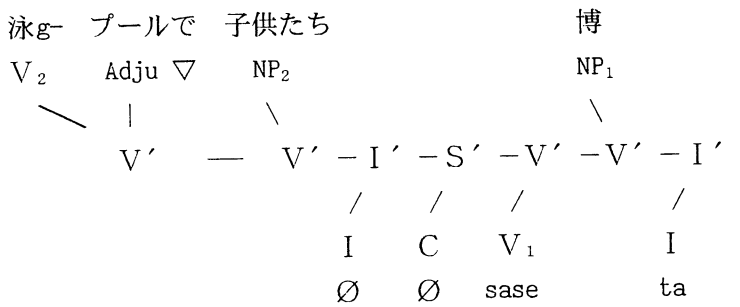
1．井上(1989)に見る「GBつまみ食い消化不良症候群」

以下では久野・柴谷（共編）[1989]『日本語学の新展開』に載った井上和子「主語の意味役割と格配列」に見られる基本的かつ重大な問題点を指摘しよう。問題点というのは、今日の田原の目から見れば「教祖」チョムスキーのであれ、「使徒」井上のであれ、チョムスキー派の（論文構築）方法論自体が巨視的な問題点ではあるが、ここでは論点を小さく絞り、井上氏が（特に依拠したといわれる）Chomsky [1986]の理論を曲解・歪曲（換骨奪胎）して、自説に都合のいいように利用している点を見ていこうと思う。かつては日本言語学会の会長、そして神田外語大学の学長をされた方でもあり、そんなお方を批判するのは気の重いことであるが、言語学史総括のために勇を鼓して検討してみたい。

まず同論文で最初に挙げられた樹形図（句構造図式）は(1)=原著では(11)を展開した次の図(1D)=原著(11′)である【但し原著で縦書きの樹形図を横書きに改めて引用する】。

(1) 博(ひろし) が子供たちをプールで泳がせた。

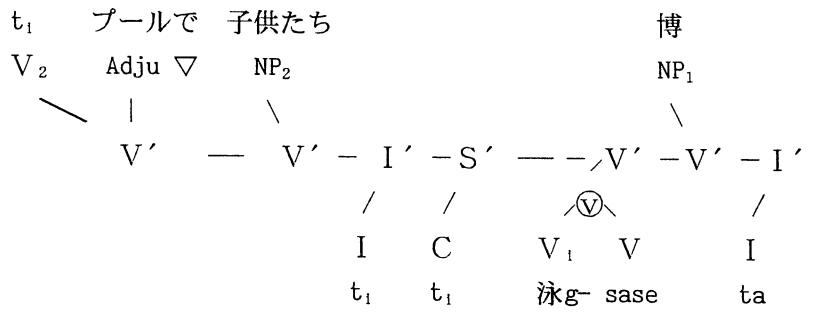
図(1D)



図(1D)の体系では、全般的には各範疇はゼロか１かの投射段階をもち、２段階までの投射は容認されていないようであるが、突如として現れるＳ′に対しては、註でＳ′＝Ｃ″であり、Ｃ′にその指定辞が加わって形成される範疇と述べられているので、Ｃに関してのみ２段階の投射が仮定されているようである。またV_2に関しては、Adju（修飾語）の有無に関係なく「泳ぐ」のような 'unergative' 自動詞はそのままＶ′になると考えられ、その主語「子供たち」はそれに付加される、と考えられているようだ。つまりＣの場合を除いて従来（Chomsky [1986]など）の指定辞は付加詞として処理されることになる。

さてこのＤ構造が主要部移動によって次の図(1S)（Ｓ構造）に変わるという。

図(1S)



つまり「泳g-」がＩ、Ｃのそれぞれ付加詞を経由して使役動詞Ｖ(sase)の付加詞の地位へと移動するが、その位置で複合動詞ⓥ「泳がせ」を形成する、と解釈するのである。

井上氏は図に現れたt_1（痕跡）はみな先行詞V_1に適正統率されている、と言っているが、はたしてそうか、疑問を禁じえない。なぜなら図で移動後のV_1(泳g)の位置と始発点のＶ(t_1)との間に３つの最大投射すなわちＶ′－Ｉ′－Ｓ′（=Ｃ″）が挟まっているが、まずＶ′がBarriers理論でいうところの阻止範疇(Blocking Category, ＢＣ)である。なぜなら語彙範疇でないＩ（屈折要素）の姉妹になっている（つまり 'L-mark' されていない）から。従ってその上のＩ′が継承(inheritance) による障壁(Barrier) となる。

またⓥの姉妹であるＳ′にも問題がある。これはⓥにL-markされているからその意味では障壁にならないが、いま考察下の先行詞は複合動詞ではなく「泳g-」だけである。井上氏が主に依拠したといわれるChomsky[1986] には 'exclude'「疎外する」(と私は訳したい）という概念が導入されており、同著のp.9 の例示と説明によると、

{16}…δ…[$_\gamma$ α [$_\gamma$…β…]]　（αは範疇γに対する付加詞、という構造）において、もしγがβに対する障壁であれば、δはαを疎外し、γはαを疎外しない、と云う。しかしαはγを疎外し、δはαとγの双方を疎外し・かつ双方から疎外される、とも云う。

この疎外の概念を使って「統率」の概念が定義される。すなわち

{18}αがβをm統御していて、βにとってαを疎外するような障壁γがないならば、その場合のみαはβを統率する【逆にそのような障壁γがあればβは統率されない】。

というものである。

ここで先ほどの図式(1S)から問題になる部分を取り出し、{16}と比較してみよう。

図式(2)　S′ [$_{\omega}$ [$_{V}$ **泳g-**][$_{V}$ sase]]　**【ただし泳g-が sase に対する付加詞】**

この図式の sase をβと見なし、**泳g-**をαと見なし、S′ をδと見なせばまさに{16}と同型である。その際γにあたる範疇が内部構造をもたないX^{0} （＝[$_{V}$ sase]）である点が{16}と異なり、X^{0} が障壁になり得るかどうかが問題となるが、VがV自身や別のVにθ-mark されることはない、という意味で「VはVにとっても障壁」という考えも成り立つ。とにかく型としてはそっくりなので、（最初からX^{0} は障壁にならないと決めてしまえばともかく）V^{0} が障壁ならば「泳g-」はS′ を疎外することになる。そしてS′ はV痕跡を支配している。t_1はCに付加されているが、直近の支配者がS′ だからそうなる。

結局、γ＝V^{0} の場合を特に除外しない限り、図式(1S)の「泳g-」からCに付加されたt_1を統率することは、途中のS′ が疎外されているかぎり不可能ということになる。以上のようにBarriers理論に則ると、「泳g-」と基底痕跡との間に先程の明白な障壁１つと、障壁らしきもの１つとが介在していて、とても先行詞統率が働くとは言えないのである。

ではどう修整すればいいのだろうか。つまり「泳g-」をうまく「sase」の付加詞の位置？に引き上げて複合動詞を形成させる方策は如何？ ── それは簡単だ。井上説ではゼロレベルの範疇であるI、C、Vに「泳g-」を付加したからおかしくなったのであって、付加は最大投射に対してもできるから、V′、I′、C″ (=S′)、V′ に順次付加していけばいいのである。【その結果「泳g-」は最終的には「sase」の付加詞でなく、その上のV′ の付加詞となるが、その方がむしろ合理的だ。∵「泳g-」が「sase」を修飾することができるから】

そうすれば、V′、I′、C″ (=S′)、V′ が各々２段のsegmentsに割れることで常に{16}の構造ができるが、それらはすべて「泳g-(痕跡)」を「疎外しない」ので、上部からの統率力はすべてそれらの範疇を自由通過することになり、痕跡はすべて順次上から先行詞統率されることになる。めでたしめでたしだが、実はここに重大な問題が潜んでいる。

1986年に[Barriers]が出版されるとすぐに、その理論枠組に対して心有る文法理論学者たちから猛然と批判が湧き起こった。日本では長谷川欣佑氏がそうであるが、要するに、「せっかくBarrier=障壁という概念を作って統率という効果の及ぶ範囲を確定しようと試みたのに、その境界をすり抜ける付加という手段を同時に設けて自由に活用させたのでは、障壁が骨抜きになり、そもそも概念の存在意義がないではないか」というものである。確かにその通りであるし、移動の場合でも一旦何かの（項以外の）最大投射に要素を付加して、また別の最大投射の付加詞へと移動するようにすれば障壁もへったくれもなく、痕跡はすべて先行詞統率され、句構造文法そのものが無政府状態に陥ってしまうだろう。

このようにBarriers理論は欠陥を孕む理論だったので、ごく短命に終わった。日本で騒がれていた1987～88年頃にはチョムスキーはこの理論を畳み、すでにMinimalist Program（の前身たる経済性理論）の樹立に傾倒していたようで、模倣に巧みだが洞察力に乏しい井上先生は時代遅れのジョーカーを得意げに振りかざしておられたことになる。

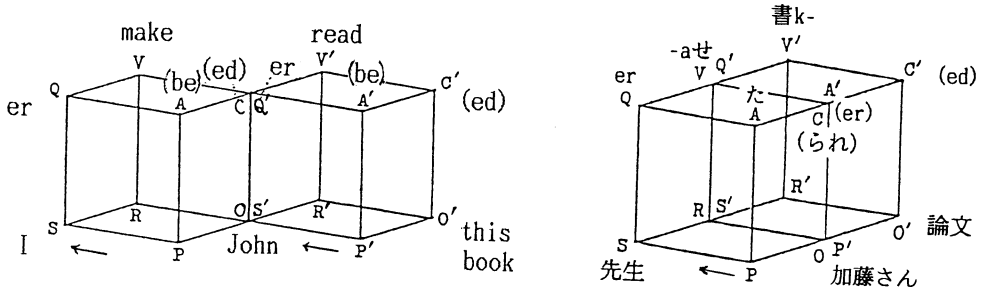
2．日本語（型）の使役構文解析に向けて ── 位相論的統語観

日本語型の使役構文は世界に広く分布していて、「泳がせ」「書かせ」のような動詞連鎖構造(serial verb construction)を使うことがその最も目立つ特徴であるが、それと連動する項の格の問題も見逃すことはできない。そこでは自動詞使役構文と他動詞使役構文とで被使役者の格付与が異なった扱いを受けるのである。つまり概略、人工擬似英語で表現すると、自動詞文から 'the teacher made swim the student.' vs. 他動詞文からは 'the teacher made write a thesis to(/by) the student.' のような差異が通常生じるのであるから、動詞部と項部との連動現象は同時に説明されねばならない。井上説のように編入によって複合動詞を作っても、項の格の問題はCase alignmentなどという処方を別に設定してprescriptivelyに規定するのでは有能な理論とは言えない。また複合動詞の内部でもhostとguest の区別は維持されるのであって、成分動詞がまったく平等であっては「させ泳いだ」「させ書いた」という結合が生じかねない。この難点はVan Valin らの主張するＲＲＧ(Role and Reference Grammar)における核結合(nuclear juncture)の概念においても解決されていない。── この思想は概ね有能ではあるが。

とはいえ、核結合と芯結合(core juncture) の区別を明確化したことはＲＲＧの功績であって、核結合をもたない英語を規範言語とした変形生成文法では、核結合による日本語やロマンス諸語の使役構文をうまく分析できないのである。芯結合というのは正規英語の 'The teacher made the student {swim/ write a thesis}.' がもつとされる構造で、最大３個の項が、主節の受動者＝副節の能動者という兼務成分を媒介として統合された構造であり、文法的には主節の目的語が副節の主語になっている。ただ、ＲＲＧのこのような思想も私から見ればまだprescriptive かつdescriptiveであって、説明力が充分でない。

さて、日本語型の使役構文と英語型の使役構文との構造は、筆者提唱の「位相論的統語観」(Topological View of Syntax, 或いはTopologically Viewed Syntax)によってＲＲＧよりも深い説明をつけることができる。この思想は節文(clause)を３次元の構造、基本的には立方体モデルによって表示し、意味論先行で統語構造を説明しようとする枠組であり、田原(1986)、田原(1993)などで提示されたものである。まず次の図(3) を御覧あれ。

図(3)



図(3) のもとに左右２つの図があるが、左図は例文(4)、右図は例文(5) の「統語構造」である。【因みに、変形文法のＳ構造に相当するものは「統語連鎖」と呼ぶ】

(4) I made John read this book.

(5) 先生が加藤さんに論文を書かせた。【強制的な意味の場合】

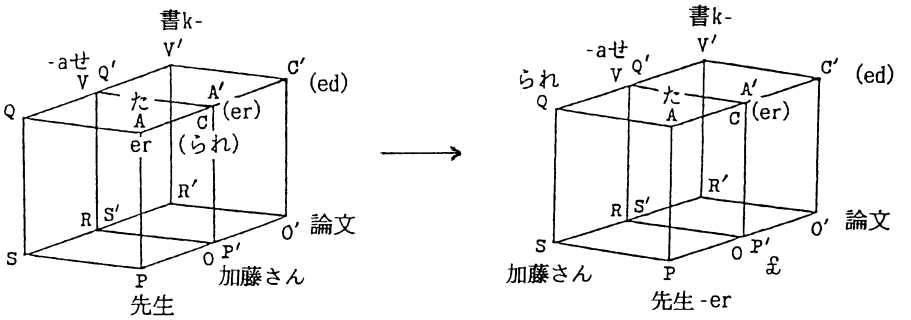
左図はいわゆる芯結合による英語の使役構文を表わし、右図は核結合による日本語の使役構文を表わしている。主節と従属節との繋がり方は、左図では主節の稜ＯＣと従属節の稜Ｓ′ Ｑ′ が接着することによっているが、右図では主節の面ＶＲＯＣと従属節の面Ｑ′ Ｓ′ Ｐ′ Ａ′ が接着することによっている。前者を稜接着型、後者を面接着型と呼び、それぞれＲＲＧの芯結合・核結合に対応するわがＴＶＳでの構造である。前者（左図）では従属節【構成する各成分は「′」付きの記号で表わされる】が主節の面ＶＲＯＣ（これが変形文法のＶＰに相当する）の延長上に付いているから、「主節のＶＰに埋め込まれている」という解釈も容認できそうだが、右図では横ずれ断層的にもっと主節に 'telescoped' すなわち「めり込んで」おり、従って「埋め込まれて」いるとは解釈できない。

ＴＶＳについてはこの場で十全に解説できないので、詳細は私が折々発表した関連する論文を見て頂きたいが、図でＳまたはＳ′ にある主語「I, John, 先生」は一つ前の「統意構造」ではＰかＰ′ にあったものである（矢印はそれを表わす）。右図の「加藤さん」は「統意構造」での位置のままである。そして、意味的には主節の目的語Ｏの地位を兼務するにも拘らず、格付与に関しては従属節のＰ′ から（対格言語内）能格を付与され「に」で標示される。しかし日本語には「許容的使役構文」があり、その場合には「加藤さん」は「弱主語化」を受けてＰ′ からＳ′ へ転送され、主節のＲから与格を付与されてやはり「に」で標示される。だから表層的な「に格」は実は異なる二つの格の混成である。

そう言える理由は、使役受動文になるのは強制的使役の場合だけであって、許容的使役の場合は受動構文の代わりに「…てもらう」構文が使われることである。強制の場合は被使役者がＯ＝Ｐ′ の位置にあるので、それがＳに転送されれば受動文となる。許容の場合は被許容者がＲ＝Ｓ′ に転送されてしまうので、もうＳに転送されないからである。

(6) 加藤さんが先生に論文を（／始末書を）書かせられた。【強制的に】

図(4)



図(4)の右図が例文(6)の統語構造(syllexic structure)であるが、左図はその基になる統意構造(sysemantic structure)であって、同時に図(3) 右の能動文の統意構造でもある。能動文では **先生－er** のペア(=能動者nexus)がＳ－Ｑの位置対に転送されたが、今度はそれに代わってＯ－Ｃから **加藤さん－られ** のペア(=受動者nexus)がＳ－Ｑに転送されれば、図(4) 右の受動文の統語構造となる。なお使役受動構文には「大受動者」が主語になる次のタイプもあるが、派生がやや複雑なので今は触れず、後で扱うことにする。

(7) （名誉教授の喜寿記念）論文は先生によって加藤さんに書かせられた。(許容/強制は不問)

日本語タイプつまり面接着型の使役構文はロマンス諸語などを広くカバーしているが、フランス語の 'laisser' は英語型（稜接着型）の構文(8) も許している。

(8) Je laisse François écouter la radio.「私はフランソワにラジオを聞かせる」

(9) Je laisse écouter la radio à (/par) François. （同上：面接着型の構文）

ドイツ語 'lassen' についても両型を許す点は同様である。普通は(10)の英語型だが、

(10)Ich ließ die Sekretärin den Brief abtippen. 「私は秘書に手紙をタイプさせた」

(11)Ich ließ den Brief von der Sekretärin abtippen. （同上：面接着型の構文）

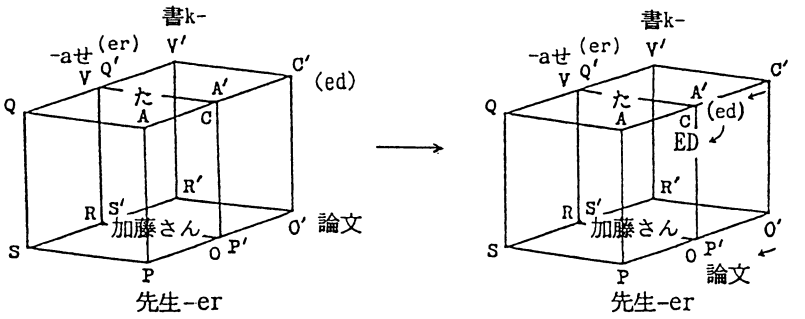
両方の型の間の意味のニュアンスについては私には確言できないので、それらの言語のnative speakerに委ねたい。ともかく位相論的な型の差があるという認識が大切である。

自動詞使役構文には触れてこなかったが、強制的使役において被使役者がＰ′＝Ｏの座を占め、主節のＯから「を格」の標示を受ける点を除けば図(3) 右図と大差がない。他動詞の場合と違って従属節に「を格」の項がないから、どの節の目的語か曖昧にはならないので、被使役者が堂々と「を格」を取れるのである。ただし、許容的使役の場合は他動詞の場合と同様に主節のＲに転送されて与格の「に格」を取るのが普通である。

さて、以上の話だけでも変形生成文法と位相論的統語観との勝敗は明らかであろう。要するに芯結合（稜接着型）を最も緊密な節文結合とし・類型論的により緊密な結合である核結合（面接着型）をもたない、英語という言語を規範とした変形生成文法では、日本語など核結合をもつ言語の多い世界のＵＧなんか記述も分析もできないのである。

次は先ほどお約束の、(7) の型の使役受動構文を考察してみよう。

図(5)



図(5) も図(4) 左の（他動詞）使役構文の統意構造から出発することに変わりはない。しかし途中で図(5) 左の図と右の図を順次経過するのであって、被使役者 **加藤さん** がR＝S′ の座に転送入居する。このことは許容的使役の場合は当然であるが、今回は強制的使役の場合でも起こる。なぜなら (7)の型の構文では **先生** が事件の起動者となって最終結果が書き上がった **論文** として残ったことに焦点が当たっており、途中の **加藤さん** が被強制者であろうと被許容者であろうと、そこは焦点から外れているからである。従ってこの地位の成分たる **加藤さん** には常に主節のRから与格の「に」が与えられる。

ついで構築段階は図(5) 右図に移る。左図でO′ －C′ にあった **論文－ed**(受動者資格述語）のペアは、O′ 成分を主題化したいという表現欲求によって主節に牽引され、O位置に入居させられる。それに伴い述語 **ed** もCに移る。ところが困ったことに、相棒（項）の **論文** は決して主節動詞 **-aせ** に対する受動者ではない。論文は書かれたのであって、それが使役されたわけではないからである。そこで資格述語は何か別の資格を表わす述語に変わらなければならない。先ほどちょっと出た「大受動者」がそれである。

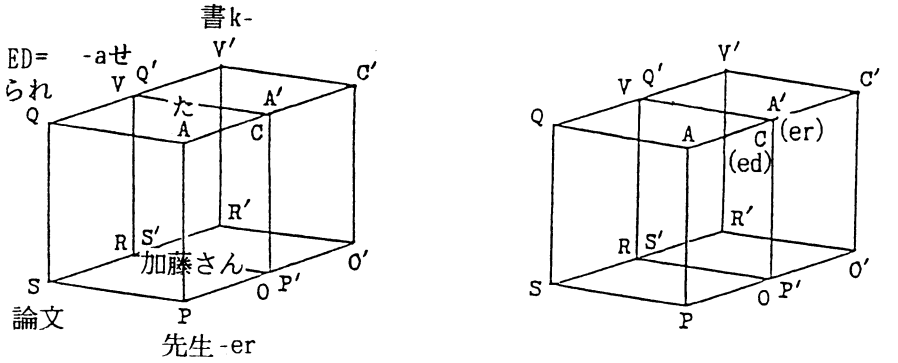
主節の舞台では使役された **加藤さん** がすでに受動者である。その動作の結果できた物だから **論文** は受動者から見てさらに受動者というべきであり、その身分を私は「大受動者」と呼ぶことにした。図でC′ から移転してCに入居した時点で **ed** は **ED** （大受動者資格述語）に変わるものとする。ただし音形は **(r)are** のままである。

こうして図(5) 右図で主節のO－Cの座を占めることに成功した大受動者 **論文－ED** のペアは、一般の受動構文化の手続に従ってS－Qの地位に進出する。その結果が図(6) 左図であるが、Sが主語、Qがそれとnexus を組む述語の位置であることは、既出の図(3)~(4) と比較しても明らかであろう。こうして例文(7) の統語構造が得られた。

井上先生(1989)(p. 89~90) は例文「{18}＊作文が先生によって太郎に書かせられた」を挙げてこれが非文であると断じ、変形文法での説明【殆ど説得力なし！】をくどくど付けておられるが、「作文が」を話題化して「作文は」にすれば適格であるし、「先生によって太郎に作文が書かせられた」の語順にすればこれもOKである。さらに「飼育当番によって兎にクローバーが食べさせられた」となると、「飼育当番によって兎がクローバーを食べさせられた」よりも自然に響き、後者は不当に兎の主体性を強調しているように響く。これで見るように、井上先生の日本語感覚は歪んでいると言わざるを得ない。

ついでに上記の、「{18}」の例文がなぜおかしいかを考えてみよう。「作文は」にすれば話題つまり旧情報を表わすから文頭が最もふさわしい位置であるが、「作文が」であれば、それ自体が新情報であるか、新情報である文全体に平坦に組み込まれている筈である。前者であれば「作文が」は文の後部になければならず、後者であれば事件の時間的または論理的流れを素直に写像する語順が望ましい。いずれにせよ **先生→太郎→作文** の順に配列された項は、帯びる格に関係なく意味的な 'energy flow' に一致し、自然に響くのである。最後に、得られた例文(7) の統語構造を図(6) に図示しておく。

図(6)



図(6) 左図がその統語構造であるが、主語 **論文** の資格('grand-undergoership') を規定する述語 ED は **られ** として実現している。音形は同じでもこれは単なる受動者資格述語の **られ** とは異なることに注意が肝要である。結局、使役能動文も使役受動文も、使役大受動者受動文も同一の、図(6) 右図の（面接着型）枠組を利用した図(4) 左図を基底の構造として産出されるのであり、それを単線型の句構造で写像するのは不可能である。

なお「られさせ」の順の結合は日本語にはない、と一般的に考えられているが、「**させ**」には放任／受忍の **させ** という用法があって、稀に次のような文例が成立する。

(12)山田さんはみすみす（／むざむざ）息子を〆〆組員に殴られさせた。

この場合は図(6) で、 **させ** を本動詞でなく「受忍者資格述語」と見なして、受忍者とペアを組んで最終的にＳ－Ｑの位置対に収容することで分析可能であろう。かなりスペースを取るのでここでは論じないが、興味をもたれた方は各自試みられたい。

３．面接着型の使役構文を句構造で写像する試み

世の中にチョムスキアンほど不思議な人たちはなく、自分らの思考枠から外れた言語の現象には一切興味を示さず、ただひたすらに単線型（１次元）の句構造で言語現象を割り切ろうとするから、筆者が位相論的統語観を提示しても、馬の耳に念仏、で無視するだけである。少しでも彼らの目が向くようにと、私は新しい句構造文法ＳＯＯＴｈ２を提案しているのであるが、依然彼らの関心は向いてこない。ＳＯＯＴｈ２というのは、最初に原始的な叙述力のみをもつゼロ述語∅ありき、から出発し、無標的な主語候補をその指定辞に地位づけ、次に他動詞がくればその指定辞に目的語を置く、というシステムであるから、いわゆる動詞の補語としての（目的語）項というものがなく、項はすべて指定辞、という簡潔な主張をしている。この点がチョムスキアンの気に入らないようだ。しかし実際に英語の諸構文の分析に使って比べてみると、多くの点でＳＯＯＴｈ２の方が説明性能が良いことがわかる。とはいえ、さすがのＳＯＯＴｈ２も１次元句構造である以上、立体構造である使役構文を完全にはカバーできないが、試みに次の図(7) を見られたい。

(13)Je fais lire ce livre à Jean. 「私はジャンにこの本を読ませる」

図(7) ＳＯＯＴｈ２によるフランス語型の使役構文の句構造【部分】

```
                    ☞    NP2(ce livre) V(lire)   NP1(Jean)
          AGo[é]      /  ↖ ←    ☜ /          /
         /     ☞  VP————————V′ ———ØP — Ø′ −Ø
       /          /  ↖ ←        ☜                ＼
 — AGo′ ———VfP———Vf′ ———Vf(faire)
                          ＼ØP———Ø′ −Ø
                            ＼NPØ(je)  ＼
```

図(7) は面接着型の使役構文で対格の項が複数出現しない、ということをキーポイントとして、不完全ながら１次元の句構造で写像を試みた結果である。ＳＯＯＴｈ２では格付与は項に隣接する上下の述語からの「挟み統率」によって起こると考え、上からの「引率」と下からの「配率(はいそう)」の交わりによって「挟み統率」を定義する。図でVf(faire) を含む方が主節で、Ｖ(lire)「読む」方の枝が従属節であるが、ともにØ述語から出発し、主語候補がその指定辞に生起している。この２つの指定辞のうち、主節の主語には当然主節のNPØ(je) が進出するので、NP1(Jean) は生起現場から動けず、このままでは格付与を受ける手段がない。従って何らかの前置詞句(eg. à Jean)に書き替わらねばならない。

lire の目的語（指定辞）たる NP2(ce livre)は lire に配率（左ポインター☜で示す）されているが、そこはAGo(受動者資格述語）の引率（右ポインター☞で示す）が及んでいる、と見るので、他動詞とAGo に挟み統率されたNP2(ce livre) は対格を認可される。

従属節の動詞が自動詞ならば、唯一項はNP1 か NP2 のどちらかに生起するが、NP1に生起した(unergative の）場合でも、空いているNP2 の位置に転居する。しかし配率者のＶは自動詞だから対格認可の能力をもたない。しかし代わりに使役動詞Vf(faire) がNP2 まで配率の力を及ぼすので、やはり引率者AGo との共同作用でNP2 は対格を認可される。

以上のように考えてどうにか使役能動文だけは派生できるのであるが、 Jean が faire からあまりに遠いので、この項を主語とする使役受動文はできそうもない。事実フランス語にはそういう受動文はない。主語になれる可能性が僅かに期待できそうなのはNP2 の方であり、実際日本語では(7) のように主語になっているが、やはりフランス語ではなれない。その差の原因は、第一にNP2 に及ぶAGo の引率力が弱い（つまりＶＰが直接引率され、その効果が指定辞に浸透する）からであるが、それは日本語と共通する。そこで問題は、日本語ではAGo が られ という動詞であるが、フランス語では[é] という過去分詞形成要素（すなわち抽象的形容詞）であることに帰せられよう。 られ は引率力が強く、NP2 からの反作用によって「大受動者資格述語」EDにも変わり得るが、[é] は形容詞の故に引率力が弱く、NP2 から影響されることもない。こう考えて上の問題は解決できよう。

４．まとめ

前節で述べた、句構造説で面接着型使役構文の立体構造を写像する試みはあくまで方便であって、筆者としてはそれに生命も名誉も賭ける気持はないが、割にうまくできており、辻褄が合っていてそれなりの説得力をもっている、と言っても自画自賛にならないであろう。その理由は、そもそもＳＯＯＴｈ２が位相論的統語観に基礎を置いて、それを考慮に入れながら作られた説だからである。だからチョムスキーの障壁理論や井上氏のその模倣適用のように、内蔵する矛盾によって急速に破綻する心配はない。

それにしても、1995年以来「言語学者？」としてのチョムスキーの凋落は顕著であり、今や彼は米国内外から皮肉な目で見られる国際政治評論家に過ぎない。日本国内でもこの学派は最近とみに元気がないが、これを単に「流行が去ったのだ。学説も諸行無常さ」で片づけてしまい、総括も反省もしないのでは、また新学説が出たらすぐ飛びつき、10年後には結実のないまま廃棄する、といったことの繰り返しになるであろう。だから、流行が去った今こそ冷静にチョムスキーの興亡の理由を追究しなければなるまい。そして狂騒曲に乗って踊った日本のチョムスキアンたちの資質も評価しなおすべき時であろう。

参考文献

井上和子(1989)　「主語の意味役割と格配列」 in 『日本語学の新展開』（久野暲・柴谷方良　編）、くろしお出版、東京

Chomsky, Noam [1986] ***Barriers***. The MIT Press, Cambridge, Massachusetts

Van Valin, Robert D. Jr. (ed.) [1993] ***Advances in Role and Reference Grammar***. John Benjamins, Amsterdam

田原　薫(1986)　「能動と受動の交差現象を考える－位相論的統語観の見地から」『言語研究』第90号、pp. 27~47、日本言語学会、東京

田原　薫(1992)　「「服汚され文」の二義性を生む機構」『ニダバ』第21号、pp. 1-10、西日本言語学会、広島

田原　薫(1993)　「他動詞・受動・間接受動構文の認識的基盤」『認知科学の発展・第６巻』、pp. 143~171、講談社、東京

田原　薫(1997a)　「新句構造文法SOOTh2の基本理念」『言語文化学会論集』第８号 pp. 59~71、言語文化学会、大阪

田原　薫(1997b)　「新句構造文法SOOTh2の基本理念－（続篇）」　『言語文化学会論集』第９号 pp. 65~76、言語文化学会、大阪

田原　薫(1998)　「新句構造文法SOOTh2の基本理念－（完結篇）」『言語文化学会論集』第１０号 pp. 63~77、言語文化学会、大阪

田原　薫(2000)　「使役構文の位相論的統語分析－日英両文型の不同型性と英語本位の統語論への戒め」『言語文化学会論集』第１５号 pp. 267~278、言語文化学会、大阪